

主 題：不安の中に輝く確かな知恵②

聖書箇所：詩篇 37篇12-20節

テーマ：心を騒がせるようなものが周りにあふれる中で、みことばの知恵に頼って生きていく

〇年老いた人物からの四つの知恵：

先週から、私たちはこの詩篇を通して、年老いた人物から与えられる実践的な知恵について学び始めました。著者のダビデは晩年、自分の人生を振り返って、この詩篇のことばを記してくれていました。数え切れないほどの出来事を実際に経験した彼が、人生を通して学んだ大切な真理を、ここに知恵として与えてくれたのです。振り返ってみれば、ダビデの人生は最初から最後までいろいろな敵と戦って、攻撃や迫害を受けることが多々ありました。友の裏切りにも遭い、孤独になることも、理不尽な理由でのちをねらわれることも、病を患って床に伏せることもありました。王として非常に大きな重圧を覚え、子育ての難しさを感じたり、貧しさや飢え、罪の深刻さやその罪に対する神様の赦しというものも味わうことができました。間違いなくダビデは困難や痛みというもの、危険というもの、悲しみというもの、喜びというもの、慰めというもの、平安というものを知らない人物ではなかったのです。彼はよい時も悪い時もどちらも知っていました。そして、そのすべてを通過してきた彼が、同じように不安や恐れを覚え、苦難にあふれる世の中に生きている、今の私たちがどう生きていくべきなのかをはっきりと教えてくれていたのです。私自身も今あなたが経験しているような難しさや苦しみを通過してきました。そのすべてを経験してきた私が、人生を通して学んだ大切な知恵をあなたにも教えましょうと、ダビデは言ってくれていました。ダビデの知恵、それは確かに今の私たちがみんな聞かなければならない非常に必要な大切な助言でした。

1. 主に信頼して忠実に歩むこと 1-11節

そして今回は、実際にダビデが教えてくれていた一つ目の知恵、「主に信頼して忠実に歩む」ということについて、私たちは学びました。ダビデは私たちに、たとえどんな状況に置かれることがあろうと、価値のないものにすぐに心を奪われるのではありません、価値のあるものに心を留め続けなさいと教えてくれていました。何があろうとも、心配することなしに、偉大な主に信頼して、主にすべてを委ねて、主のみことばに従って忍耐をもって忠実に歩んで行きなさいと。

最初の教えは、ある意味非常にシンプルで、基本的なものだったかもしれません。私たちにとって、当然何度も何度も聞いたことのあるものだったでしょう。でも、私たちにとって、これほど欠かすことのできない非常に大切なものもありませんでした。それは私たちが不安や恐れを抱く場面に直面すれば、周りの状況に心が奪われてしまったり、容易に神様のことを忘れて自分の知恵に頼り頼むことがあるからです。忠実に歩んでいくことをやめてしまう弱さを私たちが持っているからです。だからこそ、ダビデは心を留めるべきところに常に心を留めているように、その大切さを改めて私たちに教えてくれていました。

2. 全体像を正しくとらえて歩むこと 12-20節

二つ目の知恵に関しては、12-20節の部分に見て取ることができます。その前に、振り返りも兼ねて37：1-20をお読みします。

詩篇37篇

「:1 悪を行う者に対して腹を立てるな。不正を行う者に対してねたみを起こすな。:2 彼らは草のようにたちまちしおれ、青草のように枯れるのだ。:3 【主】に信頼して善を行え。地に住み、誠実を養え。:4 【主】をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。:5 あなたの道を【主】にゆだ

ねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。:6 主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。:7 【主】の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、悪意を遂げようとする人に対して、腹を立てるな。:8 怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。:9 悪を行う者は断ち切られる。しかし【主】を待ち望む者、彼らは地を受け継ごう。:10 ただしばらくの間だけで、悪者はいなくなる。あなたが彼の居所を調べても、彼はそこにはいないだろう。:11 しかし、貧しい人は地を受け継ごう。また、豊かな繁栄をおのれの喜びとしよう。:12 悪者は正しい者に敵対して事を図り、歯ざしりして彼に向かう。:13 主は彼を笑われる。彼の日が迫っているのをご覧になるから。:14 悪者どもは剣を抜き、弓を張った。悩む者、貧しい者を打ち倒し、行いの正しい者を切り殺すために。:15 彼らの剣はおのれの心臓を貫き、彼らの弓は折られよう。:16 ひとりの正しい者の持つわずかなものは、多くの悪者の豊かさにまさる。:17 なぜなら、悪者の腕は折られるが、【主】は正しい者をささえられるからだ。:18 【主】は全き人の日々を知っておられ、彼らのゆずりは永遠に残る。:19 彼らはわざわざいのあるときにも恥を見ず、ききんのときにも満ち足りよう。:20 しかし悪者は滅びる。【主】の敵は牧場の青草のようだ。彼らは消えうせる。煙となって消えうせる。」

さて、今回この箇所では教えられる二つ目の知恵は「全体像を正しくとらえて歩む」ということです。ありとあらゆることを経験したダビデは、主に信頼して忠実に歩むことだけではなくて、全体像を正しくとらえて歩んでいくことの大切さを明らかにしてくれていました。不安にあふれたこの世で歩み続けていくためには、それが欠かせないと言うのです。でもそれが実際にどういうことなのか、ダビデは12-20節を大きく二つの部分に分けて説明してくれていました。前半部分の12-15節のところでは、そもそも正しくとらえるべき全体像というのが一体何なのか、どのような全体像を私たちが覚えているべきなのかについて、そして後半部分の16-20節では、その全体像を正しくとらえた上で、実際にどのように歩むべきなのか、どんな生き方をすることが私たちに求められているのかを教えてください。

a) 正しくとらえるべき“全体像” 12-15節

正しくとらえるべき全体像に関して、ダビデは12節で「悪者は正しい者に敵対して事を図り、歯ざしりして彼に向かう。」と述べていました。ダビデはここでまず人々に、現実存在するある問題を思い出させるのです。その問題とはシンプルに、悪者は正しい者を憎んで悪を働くということです。これが現実の問題として存在することでした。罪によって汚れたこの世界にあって、神様に逆らう者たちは、神様の前を正しく歩もうとする者を苦しめようとします。それは実際の出来事として存在すると言うのです。ここで「事を図る」という動詞が使われていましたけれども、このことばには、もともと何かを行動に移す前に綿密に計画や戦略を立てるという意味があります。このことばが否定的に用いられれば、悪者が正しい者に対して悪を企てることを表現するのに使われたりします。悪者は、自分たちの望む目的を達成するために綿密に計画を立て、それを実行するのです。興味深いのは、この「事を図る」ということばは、旧約聖書の中で13回登場しますが、実は、一番初めはノアの洪水の後、バベルの塔を建てる人々の姿を表わすのに用いられていました。創世記11:4-6に「:4 そのうちに彼らは言うようになった。「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。われわれが全地に散らされるといけないから。」:5 そのとき【主】は人間の建てた町と塔をご覧になるために降りて来られた。:6 【主】は仰せになった。「彼らがみな、一つの民、一つのことばで、このようなことをし始めたのなら、今や彼らがしようと思うことで、とどめられることはない。」と記されています。6節に出てきた「しようと思うことで」ということばが、「事を図る」と同じものになります。まさに彼らの姿こそ悪者の姿でした。彼らは自分たちの願いをかなえるために、自分たちの望みをかなえるために、自分たちの持てるありとあらゆる知恵や力を用いて塔を建てようとしていたのです。彼らは神様に従って、この方の栄光を現そうとするのではなくて、神様に逆らって、自分たちの栄光を現すために事を図っていました。これこそがバベルの時代も変わらず、今の時代においても変わらない悪者の生き方でした。

もちろんダビデは、そんな悪者が存在していることを自分自身の体験を通しても知っていたのです。以前に見た詩篇 31 : 13 で、彼は同じこのことばを用いて、「私は多くの者のそしりを聞きました。

「四方八方みな恐怖だ」と。彼らは私に逆らって相ともに集まったとき、私のいのちを取ろうと図りました。」と述べていました。この「図りました」ということばが同じものになります。ダビデは彼を傷つけ、そのいのちを奪おうと企む者たちによって取り囲まれて、大いに苦しめられることがありました。彼はこうして悪が確かに存在していること、悪者によって正しい者が迫害を受けることが実際の問題として存在していることをよくわかっていたのです。

でも、そもそもどうして悪者は正しい者に対して敵対して、それを苦しめようとするのでしょうか？なぜ正しい者に対して悪を図ろうとするのでしょうか？そのことに関して、ダビデは 12 節の後半部分で、「悪者は正しい者に敵対して事を図り、齒ぎしりして彼に向かう。」と述べていました。この「齒ぎしりして」ということばは、「歯をむき出す」と訳されることもあります。このように齒ぎしりをする人物というのは、妬みや憎しみに駆られて、大きな怒りをはっきりと表に出しているのです。この齒ぎしりするということばが私たちにとって最も想像しやすいのは、恐らくステパノの証を聞いた人々の様子かもしれません。使徒 7 : 54 に、「人々はこれを聞いて、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって齒ぎしりした。」と記されておりました。ステパノのことばは間違いなく真理のみことばでした。でも、それを聞いていた人々はそれを受け入れようとはせずに、むしろ怒りに燃え上がっていたのです。彼らの心は真理を拒絶し、また余りにも憤っていたので、彼らは大声で叫びながらステパノのもとに押し寄せ、そして町の外へと追い出して、彼を石で打ち殺すのです。こうして神様の前を正しく歩もうとし、真理を大胆に述べ伝えたその人物は、彼を憎む者によって彼のことを忌み嫌い、彼に対して怒りを燃やす者たちの手によって殉教していきました。正しい者に対して、悪者たちは怒りを燃やすのです。

でも、こうしてステパノのような人物の姿を覚える時に、イエス様のことばを思い出します。イエス様はヨハネ 15 : 18 - 19 で「:18 もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。:19 もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。」と述べておりました。これが真実でした。イエス様はあらかじめはっきりと言われていたのです。自分を憎んで十字架につけたような、そんな世は必ず自分に従って歩もうとする者も憎むようになります。神様に逆らう者たちは、自分と同じ考えや自分と同じ基準に基づいて歩む者のことは愛そうとしますが、自分たちとは違う、自分たちのうちの暗闇を照らし、自分たちの悪い行いを明るみに出すような真理は受け入れることができないのです。受け入れることができないばかりか、それを憎むのです。光であるイエス様のことを憎んだ世の中は、救われて同じように光の子どもとして歩もうとする者たちのことも、当然忌み嫌って苦しめようとするのです。これがみことばが教えてくれている現実的な問題でした。悪というものは、確かに実際に存在するし、信仰者は真理を憎む者によって、苦痛を味わうことがあります。私たちはそのような困難な現状を実際に日々目の当たりにするのです。それはニュースを通してかもしれませんし、自分たちの実際の体験としてかもしれません。そのようなものを見る時に、私たちは恐れや不安を覚えてしまいそうになるのです。

ダビデはこれが現実ですよと教えてくれました。でも、これがすべてではありませんでした。ダビデは悪者が正しい者を苦しめるという現実の問題をつきつけて終わっていたのではなかったのです。では一体全体像とは何なのか、そのことに関してダビデは 13 節から続けて述べておりました。「:13 主は彼を笑われる。彼の日が迫っているのをご覧になるから。:14 悪者どもは剣を抜き、弓を張った。悩む者、貧しい者を打ち倒し、行いの正しい者を切り殺すために。:15 彼らの剣はおのれの心臓を貫き、彼らの弓は折られよう。」と。これが全体像でした。確かに、私たちの目の前で悪者が正しい者を傷つけて、一見すれば悪が勝利しているような状況が起こっていたとしても、聖書が教えてくれるのは、それは全体の一部でしかないということです。もう

少し目線を広げてみれば、そのような悪を働く者たちを、神に逆らって歩むような者たちを、天では主が笑っておられると言うのです。13節に「主は彼を笑われる」と書いてありましたけれども、この「主」ということばは、いつもの太文字の“ヤハウエ”ではありませんでした。ここには“ヤハウエ”ではなくて、“アドナイ”が用いられているのです。言いかえれば、この「主」というのは、主権者なるお方だということです。この主というのは、すべてのものを思いのままにすることができる、権威ある支配者だということです。そして、そんな力ある主権者なるお方が、天から悪者がしていることをご覧になる時に、それを笑われるのだと言うのです。もちろんこれは何か愉快で、おもしろいから神様が笑っているわけではありません。彼らのやっていることが余りにも滑稽で、愚かなものであるからこそ、それを見て失笑されているのです。以前に見た詩篇2篇でも、ご自分に対してさまざまな策略を練って、逆らって戦いを挑もうとするような国家や王様に対して、神様は笑っておられました。詩篇2：4に「天の御座に着いている方は笑い、主はその者どもをあざけられる。」と書いています。偉大な力を持った主権者が、人々がたくさんの知恵を持ち出してきて、どうかして神様に逆らおうとしているのを見る時に、彼らのやっていることが余りにも無意味だからこそ、すべてが愚かだからこそ神様は笑われていたのです。

でも、主が笑われる理由はそれだけではありませんでした。すべてを支配されている神様は、13節に「主は彼を笑われる。彼の日が迫っているのをご覧になるから」と書いていました。これは言いかえれば、悪を行う者たちがそれぞれさばかれる日が必ずやって来ると言うことです。そしてその日はもう既に主権者によって定められているということです。彼の日がもう定まっていて、それが一日一日、一步一步近づいて来ていると。それだけではなくて、14-15節を見ても、「14 悪者どもは剣を抜き、弓を張った。悩む者、貧しい者を打ち倒し、行いの正しい者を切り殺すために。」とありました。悪者たちは、神様の前を正しく歩もうとする者たちを打ち倒そうと剣を振り上げたり、弓を張ったりするのです。でも、その後15節「彼らの剣はおのれの心臓を貫き、彼らの弓は折られよう。」と、つまり彼らは正しい者を攻撃しようとするけれども、その振り上げた剣がそのまま自分のところに返って来るし、そのようにして張った弓が折られる、成功しないと。

13-15節のところで、ダビデは全体像を教えてくださいました。確かに悪者は正しい者を迫害し、悪者が繁栄するということは存在している。でもそれはたった一部でしかない。もう少し全体を見れば、その者たちがさばかれる日は必ずやって来るし、今は好き勝手にやっているその者たちが必ず正しい報いを受ける日がやって来る、そんな結末はもう定まっている。だから神様は笑っているのです。愚かな者たちだ、いろいろな策略を巡らせて、正しい者を傷つけようとしているけれども、私に従おうとする正しい者たちを滅ぼそうとしているけれども、あなたたちが用いようとしたその武器で、最後は自分自身が滅ぼされることになる。結局悪には、それにふさわしい報いが用意されているのだと。そしてこれが、私たちが覚えていなければならぬ聖書が教えてくれる全体像でした。確かに一時的に悪が勝利しているように思えるかもしれませんが、正しい者がしいたげられて、神様に逆らって生きる者たちが何の問題もなく、思いのままに生きている姿を目にすることも実際にあります。なぜだと思いませんか？それは、今はまだその日が来ていないからです。彼の日は決まっているけれども、まだその日は来ていません。でも来ていないだけで、みことばは主の前に悪を行う者がさばかれる日はもう定まっていて、その日に一刻一刻と近づいていることを明白に教えてくれていたのです。いつまでも悪がはびこっていることはありません。必ず正しい者にはそれにふさわしい報いが、悪者にはそれにふさわしい報いが、どちらにも与えられるようになるのです。

そんなすべてのことを支配されているのが、主権者なる神様だということです。すべてのことをご覧になって、この方は笑っておられる。だとすれば、この全体像を私たちが正しく覚える時に、周りで起こっているような状況に対して、私たちはどのように応答するべきなのでしょう？確かにニュースを見てみれば、あらゆるところでひどい悪が横行しているのを見ます。先週もタイでひどい殺人事件が起きたという悲しいニュースを見ました。私たちのうちに不安や恐れを抱かせるような出来事が日々生じています。それは紛れもない事実です。でも、私たちはその一部分だけを全体図から切り取って、そこだけにいつも心を奪われてはいないでしょうか？目の前に起こっていることだけに心がとらわれて、神様を忘れ、喜びや平安を失っていないでしょうか？また、主に忠実に歩もうとする中であって、神様を忘れて罪を楽しんでいるような人々の姿を目の当たりにすることも確かにあります。そして時に彼らのその生き方の方が喜びや満足に満ちあふれているかのように思えることもあります。でも、私たちはそのような生き方に対して嫉妬をし、そんな生き

方に心が引かれて、彼らにならって生きていこうとするのでしょうか？主に忠実に仕えていくという責任を、はかない罪の楽しみと取りかえようとするのでしょうか？ダビデは、私たちに全体像を正しくとらえていなさいと、はっきり教えてくれていました。起こっている出来事の一部だけに心がとられるのではなくて、聖書が教えてくれる全体の姿を忘れることがないようにと。確かに私たちの周りに悪がはびこっている様子を目の当たりにすれば、心が騒いで、恐れを抱いてしまいそうになることはあるでしょう。でも、みことばは明白に教えてくれているのです。そのようなものが決して最後に勝利することはありません。むしろもう既に定められている、すべての悪が正しくさばかれる日に向かって一刻一刻と進んでいるに過ぎないのです。ましてや私たち、主を愛する者たちは、そのさばきの日を定めておられる、すべてをみこころのままに支配されている主権者に身を委ねて歩いていくことができるのです。この全体の姿を覚えるのだとすれば、そのような状況の中にあっても不安や恐れを抱くのではなく、希望を生み出して歩いていけると思いませんか？もっと言えば、みことばが教えてくれている全体図を正しくとらえ、そんな結末が待っていることを私たちが知っているのであれば、私たちはますます悪を離れて主の前に忠実に歩もうと思いませんか？悪者の神様に逆らった生き方は、いつの日か必ず正しく報いを受ける日がやってくるのです。悪者が滅ぼされる日が定まっていることを私たちが知っているのであれば、同じように歩もうとします？私たちの周りの家族や友人には、まだこの主の救いを知らない人が大勢います。もしその日が定まっていることを知っているのであれば、私たちはそのような人たちにイエス・キリストの福音を伝えようとしませんか？

ここで少し覚えてほしいことがあります。それは私たちが全体像を覚えるというのは、何も日々起こっている問題に対して、私たちが納得する答えや回答を手にするということではないということです。私たちは自分の知恵や力でもって目の前に起こっているものを理解しようとします。そして自分自身が納得できればそれを受け入れるし、逆に頭で理解できなくて納得しなければ、なぜですかと不満をつぶやいてしまうことがあります。覚えておかなければいけないのは、主の日は必ずやって来ますけれども、私たちにはそれがいつ来るのかはわからないということです。私たちには神様の知恵にあふれたご計画を到底理解することなどできません。でも、同時に私たちは必ずその日がやってくるということだけではなくて、すべてを支配されている主権者が必ず最後には悪に正しい報いをなされるお方だということも知っています。なぜかと言うと、みことばがそう教えてくれているからです。だからこそ私たちは自分たちの知恵や状況に頼り頼むことなく、すべてを支配されている主権者なるお方がそれをなされる日はもう決まっているというそのことばに信頼して歩いていくことが大切になるのです。

そして、そんな主がすべてのことを思いのままに支配されている全体像を正しく覚えるならば、私たちは主にあって何があろうと恐れや不安を抱く必要はなくなるのです。なぜなら私たちにはわからないけれども、主の日は必ずやって来る、もうそれは決まっていると、私たちはこの方の御手にすべてを委ねることができます。どんどんどんどん後回しになっているではありません。もう決まっているのです。最初から決まっているその日は必ずやって来るのです。だから私たちが理解できなかったとしても、神様が働いておられると信頼して、私たちは歩いていくことができます。だから、いろいろなものを見て、もし恐れや不安を私たちが覚えそうになる時は、自分自身に問いかけることです。今起こっている悪には必ず最後には神様が報いられるとみことばが言われていたことを、自分は覚えているだろうか？主権者なる神様がもう既に決めておられるさばきの日が迫っていると、みことばが言っていたけれども、それを自分は今ちゃんと覚えているのだろうか？聖書が教えてくれる全体の姿を果たして自分は正しく覚えているだろうか？そしてみことばに戻って、主がすべてを支配されている、そこに私たちは希望を見出すことができるのです。

b) “全体像”をとらえた者の歩み 16-20節

さて、ここまで私たちは、聖書が教えてくれている全体像というものを考えてきました。そしてそれを正しくとらえる時に、起こっている物事の一部に心を奪われて、恐れ戸惑うのではなくて、神様に信頼することの大切さを見たのです。それが、ダビデが教えてくれていたことでした。でも、これで終わりではありませんでした。ダビデは単に全体像を正しくとらえていれば、それでよしとはしませんでした。彼は同時に、全体像を正しく覚えているのであれば、それにふさわしい生き方があるということも残りの箇所記しているのです。では、どんな生き方が求められているのか――。

最初に言いますけれども、その生き方というのは、主のうちに満足を見出して歩む生き方でした。16節から見ていくと、まず「ひとりの正しい者の持つわずかなものは、多くの悪者の豊かさにまさる。」とあります。

ここでダビデが言わんとしていたことは、非常にシンプルでした。まさにことばどおりです。神様に喜んで従おうとするひとりの正しい者の持つわずかなものは、神様に逆らって歩む多くの悪者の豊かさに比べて、はるかにすぐれていると言うのです。たとえ正しい者が貧しくて、物質的な乏しさを覚えて、ほんのわずかなものしか持っていなかったとしても、悪者が持っている数多くの富や名声、持ち物といったものと比べれば、はるかに正しい者が持っているわずかなものの方が価値があるということです。でもこれを聞いて、ある人は思うかもしれません。なぜ正しい者のわずかなものが悪者の豊かさにまさるのでしょかと。普通に考えてみたら、それは少ないよりも多い方がいいに決まっているのではないですかと。ダビデはその答えを17-20節のところではっきりと教えてくれていました。彼は特にここで、悪者と正しい者との姿を対比することによって、もっと言えば全体像を見せることによって、その理由を挙げてくれていたのです。まず悪者の姿が17節と20節のところに記されていました。まず17節頭のところで、「**なぜなら、悪者の腕は折られるが**」とあります。ここで「腕」ということばが出てきていましたけれども、これはその者が持っている力や強さを表すものでした。これまでも見てきたのですが、悪者というのは決して力がない、か弱い存在ではありませんでした。悪者は力強く、知恵を働かせて、貧しい者たちや悩む者たちをしいたげようと悪を図る存在でした。彼らは自分の思いのままに、自分の願うことを達成するためであれば、自分の持てる力を用いて、自分の成し遂げたいことをなそうとする者だったのです。そしてそのような悪を働く者によって、主の前を正しく歩もうとする者たちは苦しめられていました。でも、17節「**なぜなら、悪者の腕は折られるが**」と、そんな力ある悪者の腕も折られる——悪者の持っているその力もことごとく失われ、何もすることができなくなるということです。

また、それだけではなくて20節「**しかし悪者は滅びる。【主】の敵は牧場の青草のようだ。彼らは消えうせる。煙となって消えうせる。**」と付け加えていました。ここでも悪者は最後に滅んでしまう姿が描かれています。神様に逆らって生きる者のすべてはあっけなく滅びてしまうということです。20節の真ん中に「**【主】の敵は牧場の青草のようだ**」と書いていました。つまり確かに一時的にはその者たちは牧場の青草のように、美しく豊かさを持っていることもあるということです。でも、「**彼らは消えうせる。煙となって消えうせる**」と、それらがいつまでも続くということではありませんでした。彼らが豊かに持っている、例えば富であろうが、権力であろうが、名声であろうが、どんなものであれ、すべてのものが煙のようにたちまち消えてしまうと言うのです。悪者は、たとえどれだけ多くの物を持っていたとしても、結局のところはすべてを失ってしまいます。悪者の豊かさが見せかけだけのもので、一時的なものであるからこそ、追い求める必要のない、価値のないものになるのです。なぜならどれだけたくさん持っていたとしても、最後にはなくなる、すべて消え失せるのだと。

でもその一方で、ダビデはこんな悪者の姿と対比して、正しい者の姿を描いていました。正しい者に関して、彼は17節で「**なぜなら、悪者の腕は折られるが、【主】は正しい者をささえられるからだ。**」と言います。ここにはすばらしいことが記されていました。「**【主】は正しい者をささえられるからだ**」と書いていました。この「**ささえられる**」ということばには、「何かを力づける」とか「助けを与える」という意味があります。そして、余り普段は言いませんけれども、このことばの時制を考えた時に、これには継続的な意味、慣習を表す時制が用いられていました。このことばは継続を表すのです。ということは、主は正しい者をささえ続けられるということです。主が正しい者をささえられるというのは、大きな問題や深刻な状況に陥った時だけの話ではありません。その時だけは助けてくれて、あとは知りませんではないということです。主はどんな時も正しい者を力づけられるお方だと言うのです。よい時も悪い時も、神様はいつも変わらずに正しく歩む者に対して助けを与えてくださると言うのです。余りにも苦しくて、自分の力では耐えることができないような状況に置かれたとしても、主が必要な助けを与えてくださり、倒れてしまわないようにしてくださると言うことです。これが正しい者が持っている特権の一つでした。

でもそれだけではありません。続く18-19節にも「:18 **【主】は全き人の日々を知っておられ、彼らのゆずりは永遠に残る。:19 彼らはわざわいのときにも恥を見ず、ききんのときにも満ち足りよう。**」と書かれています。ここにもすばらしい特権が記されていました。それはほかのだれでもない主が主の前を正しく歩む全き人の歩みを、その者の日々を知ってくださると言うことです。ここも「日々」と書いていました。つまり、全き者のその道を主はいつも知ってくださると言うことです。貧しい時であろうが、富める時であろうが、それは変わりません。喜びにあふれている時であろうが、悲しみに暮れている時であろうが変わ

りません。主はどんな時もともにいてくださり、私たちが何を経験しているのかも私たち以上に知っていてくださると言うのです。そして、そんな主が私たちのことを知っていてくださるからこそ、19節に「**彼らはわざわざのときにも恥を見ず、ききんのときにも満ち足りよう**」と書いていました。いつも主がご存じでいてくださるからこそ、いつも主がともにいてくださるからこそ、わざわざのときにも恥を見ることがなければ、ききんのときにも満ち足りることができるということです。

ここで少し覚えてほしいのは、ダビデは正しい者たちがわざわざききんに遭う可能性を否定はしなかったということです。ダビデはそのような苦しみにも正しく歩もうとする者が直面すること、それは現実のこととしてあるのだということをよくわかっていました。だから彼は「**わざわざのときにも**」、「**ききんのときにも**」と言うのです。そんなことはあります、でもたとえそのような状況に置かれることがあったとしても、主の十分な守りや助けがそこにはあるということを疑うことはありませんでした。ほかの何も持ってなかったとしても、ただ、主が自分を知っていてくれる、ただ主が自分のものとしていてくださる。それだけで自分の心に喜びをもたらすには十分だったのです。そんな人物の満足の源は、自分自身のうちにでも、周りの状況にでもありませんでした。それが主のうちにあるからこそ、彼は人間的に考えれば到底満足できないようなききんのときにも、満ち足りることができると口にすることができていたのです。ききんの時というと、一番正反対だと思いませんか？何もないのです。でもそんなときにも私は満ち足りることができると。

こうして悪者と正しい者との歩みの違いを見たのですが、違いを簡潔に言えば、悪者は確かにたくさんの物を持っているのです。でも、どれだけ豊かに持っていたとしても、その豊かさは最後にはすべて消えてしまうものでした。反対に正しい者はほとんど何も持っていませんでした。でも、永遠に変わることがない最も価値のあるものを持っていたのです。それが神様でした。大切なポイントは、周りの悪者が数多くの物を幾ら手にしていたとしても、たとえ自分に与えられているものが少なかったとしても、神様を持っているのであれば、それで十分だということです。神様に信頼して歩むことの方が、私たちにとっては何よりも重要だということです。ダビデはもちろん、このことをよくわかっていました。彼自身も自分の満ち足りが主のうちに見出されることをさまざまな機会を通して学びました。だから彼も、詩篇23:1で「**【主】は私の羊飼いです。私は、乏しいことはありません。**」と語っていました。私が主を羊飼いと知っているのであれば、私は乏しいことは一つとしてありませんと。

また、この点においてはあのパウロもピリピ4:11-13で「:11 **乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。:12 私は、貧しさの中にも豊かさの中にも、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。:13 私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。**」と語っていました。パウロは自分自身がどんな境遇に置かれようとも満ち足りることを学んだのだとはっきりと口にしていました。彼は貧しさの中であろうが、豊かさの中であろうが、どんな状況にであろうが満足を見出すことのできる秘訣を見出していたのです。どうしてそのような歩みが可能だったのでしょうか？改めて考えてみれば、彼の周りを取り囲んでいた状況はいつも決して簡単なものではありませんでした。一見すれば、満足を見出すことなど不可能に思えるかのような苦しみを彼は受けていたのです。むちで打たれることもあれば、難船することもあれば、同国民や異邦人から苦しめられることもあれば、たびたび眠れぬ夜を過ごすこともあれば、飢え、渇き、寒さに凍えて着る服もなくて裸でいることもありました。一体どうしてそのような中で、彼は揺るがぬ満足を見出すことができたのでしょうか？どうしてその中であって、変わらない満足を見出すことができたのでしょうか？それはパウロが自分の満足というものを揺るがない、変わることはないお方に見出していたからでした。もっと言えば、彼は自分を強くしてくださるイエス・キリストのうちに満足を見出していたのです。パウロにとって、キリストのすばらしさを知っていることは、ほかの何にもかえがたい最高の喜びでした。

同じピリピの中でも3:7-8で「:7 **しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとおもっています。**」と彼は口にしています。間違いなくキリストがパウロにとってのすべてでした。ほかのどんなものを失ったとしても、彼は愛する主を自分のものとして持っているということに最高の喜びを見出していたのです。だからパウロはたとえかつて持っていた財産や名誉を失うことになったとして

も、食べる物や寝る場所を失うことになったとしても、友人が自分のもとを離れて失うことになったとしても、何を失ったとしても、そのことで不満や憤りを覚えることはありませんでした。彼は状況が変われば失われてしまうようなものではなく、決して自分を離れていくことのない存在、キリストのうちに変わらない満足を見出していたのです。

これと同じことが別の箇所でもはっきりと述べられていました。ヘブル13:5には「5 金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」とありました。ヘブルの著者は、金銭を愛する生活をするのではなくて、今持っているもので満足しなさいとはっきりと求めていました。でも、どうしてこんな命令を彼は与えたのでしょうか？なぜ今持っているもので満足すべきなのでしょう？その答えは続きにはっきりと記されていました。「主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」と。なぜ私たちが今持っているもので満足することができるのかと言うと、それは私たちが神様を持っているからでした。決して私たちから離れることも見捨てることもないと約束してくださっているそんな素晴らしいお方を知っているからこそ、彼はどんな状況でも満足を見出すことができたのです。それさえあれば、ほかが失われたとしても十分だと。確実に言えることは、もし私たちが神様よりもそれ以外の何かを優先し始めれば、そこに不満足が生じてくるということです。もし私たちが神様ではなくて、私たちのもとを離れていってしまうような、失われていくようなものに自分の満足を見出しているのであれば、それは必ずいつか自分のうちに失意をもたらすようになります。なぜだと思いませんか？それはその物が自分のもとを離れていくようになるからだけではありません。そのような物に満足を見出しているのであれば、それを失えばまたそれを得ようとして、それを追い求めようとするからです。そしてどうにか頑張っただけで熱心にそれを追い求めて、また手にしたとしても、またそれを失って、そしてまたそれを求めて、またそれを失って……と、そのことを繰り返すからこそ、私たちは途中で疲れるようになるのです。自分のもとを離れていくような物に満足を見出そうとしているのであれば、そこには失意があり、そこには不満足が必ず生じるようになります。だからこそ一度立ち止まって、自分自身に問いかけてみてください。自分自身が一体何に興味を抱いているのか、何に自分の時間を使っていて、何が自分の生活の中心になっていて、そして何に自分が満足を見出そうとしているのか、そのことをよく考えてみてください。

パウロもヘブルの著者も、そしてダビデも、彼らの満足の源は神様のうちにありました。彼らの満足は決して変わることもない、決して離れることもない主のうちにありました。それゆえに彼らはみんなどんな状況に置かれることがあるとしても、変わらずに満足を見出すことができたのです。だとすれば、私たちひとりひとはどうでしょう？私たちも貧しい時も、富んでいる時も、どんな状況にあらうと満足を見出すことはできます。でもそれは何も私たちのうちにその力があるからではありません。それはただ私たちにとって最高の宝である、決して私たちを離れることがない、捨てることがない約束してくださった主がともにいてくださるからです。どんな時も私たちを強くしてくださり、いつも必要な助けを与えてくださり、倒れそうになる時にささえてくださるその主がともにいてくださるからです。だとすれば、私たちはこの神様を覚えることです。いつか必ず滅んでいく悪者のように、この世の物に心を奪われて、金銭や物を愛するのではなくて、この素晴らしい神様を愛して、この方のうちに喜びや満足を見出しながら歩いていくことです。確かに正しい者は信仰のゆえに多くの物を失うこともあります。でも、ほかのだれでもない主イエス・キリストを知っていることのすばらしさのゆえに、私たちはそこに満足を感じて歩いていくことができるのです。そしてこんな主に満足を見出すその生き方こそ、全体像を正しくつかんでいる者にふさわしい生き方でした。悪者の結末がどうなるかを知っている、そして正しい者に対する主のあわれみを知っている者ができるふさわしい生き方でした。

もしまだこの中に、救い主イエス・キリストを自分の主として、救い主として知らずに、自分の満足をほかの何かに見出そうとしている方がいるのであれば、それがお金であろうと、趣味であろうと、別に何だって同じです。みことばから言えることは、そこには本当の満足は存在しないということです。本当の満足はただひとり、救い主イエス・キリストのうちにのみ見出すことができます。神様に逆らう者たちの運命、その行く末はもう決まっています。間違いなく神様のさばきを受けると、はっきりと言われていました。本来であれば、私たちもみんな自分たちの罪のゆえに、神様の燃える御怒りというもの、そのさばきを受けべき存在です。でも、この救い主イエス・キリストはその御怒りを十字架の上で代わりに耐え忍んでくださり、

私たちに当然値したその罪の罰を代わりに受けてくださいました。罪のない完全な神の御子が私たちのためにその血を流してくださったからこそ、今この方を信じる者を神様は義と認めてくださるのです。この方の前に心を砕かれ、罪を悔い改めて、この方を救い主、主として信じる信仰を持ってやって来るのであれば、罪の赦しがあると約束してくださっていました。だからこそもしこの主を知らないのであれば、この主以外に満足を見出して、それを見つけられなくて苦しんでいる人がいるのであれば、本当の満足を見出す源であり、何よりもあなたの罪のために死んでくださったイエス様のもとにきょう来てください。きょうこの方を自分自身の主として救い主として受け入れてください。

また兄弟姉妹の皆さん、私たちはどんな状況にあらうとも全体像を正しくとらえるということが大切なのだとダビデは教えてくれていました。そして、そのことを覚える時に、恐れや不安を抱くことなく歩んでいくことができるとみことばは教えてくれていました。どんなことが起こっていたとしても、それらをすべて支配されている主権者がともにいてくださり、何よりも私たちがこの方のうちに満足を見出して歩むことができるのです。あなたを決して離れない、決して見捨てることはない約束してくださった主。何よりも私たちの罪のために死んでくださった主は、何にかえがたいあなたにとっての宝でしょうか？もしそうであるならば、ほかの物に心を奪われるのではなくて、この方を見上げて歩んでいくことです。どんな状況にあらうとも、ともにいてくださる主権者なるお方に信頼して、この方のうちに満足を見出して、ますますともに成長をもって歩んで行きましょう。